

翻訳通信

第Ⅱ期一〇三号別冊

闇の奥

ジョゼフ・コンラッド

大野一

一
小型帆船、ネリー号は錨を下ろし、あげた帆に音もなく、静かにたゆたっていた。潮が満ち、風はほとんどなく、河を下るなら、停泊して潮の変わりを待つしかない。

われわれの眼前には、果てのない航路のはじまりのようにテムズの河口が展がっていた。沖は継ぎ目なく空に連なり、まばゆい水面には上げ潮にのる舢舨の灼けた帆、あかねの帆影の鋭く尖ったのがじつと群れているようで、ニスを塗った斜檣が光を返す。霞の立つなぎさは海原を匍い、どこまでも平らかにきえていく。グレイブズエンド上空は暗く、さらに奥に向かって影が寄り集まるようで、あの世界一の大都市は、そこだけ動かない重苦しい闇に包まれているようにみえた。

招待してくれたのは、船長を務める会社役員。舳先に立つて海のほうを眺めるその後ろ姿を、われわれ四人はほれぼれと視つめていた。この河のどこを探しても、これほど船の似合う男はいない。船乗りにとつて信頼の代名詞とも云える水先案内の風格を備えていた。この男の仕事場が、まばゆい水面ではなく、背後にけぶるあの闇のなかにあるとは、信じがたい思いがした。

以前にもどこかで書いたが、われわれには海と云う絆がある。どれだ

け会わなくても心が通じるだけでなく、相手の長話や説教さえも寛しあえる気持ちになる。弁護士は昔気質の好い男、年長者の威厳と人柄でデツキにひとつのクッションをとり、船にひとつの敷き物に寝そべっている。会計士は早くも骨牌の箱を取り出し、重ねた牌をまさぐっていた。マールロウは船尾に胡坐をかき、後檣に凭れている。瘦けた頬、黄色の皮膚、背筋を伸ばし、苦行者のような面持ち、両の腕を垂れ、掌を外に、どこか彫像を想わせる。役員は錨がしつかりきいているのを確かめて、艫のほうにいるわれわれの間に腰を下ろした。二言三言もの憂げに言葉を交わした後は、船の上に静寂が訪れた。何とはなしに、だれも骨牌をはじめようとはしなかった。遠く物想いにふけり、ただぼんやりあたりを眺めていたい気分だった。穏やかな、あまりにも美しい光のなかで、一日が諳かに暮れようとしていた。水面はなごやかに照り映え、瑕疵ひとつない空は、清らかな光を湛えて、どこまでも優しく広がっている。エセックスの沼地にかかる霞でさえ、きらきらした紗のようで、奥の小高い森から裾をたらし、なぎさの上に透きとおるひだを折りかさねていた。ただ西の方、上流に立ち罩める闇だけが、入日の接近に憤るかのよう、刻一刻と翳りを濃くしていた。

そうして、弧を描いてじりじり落ちてきた太陽が、ついに深みに没んでいく。まばゆい白が、熱も光線も放たぬくすんだ赤にかわる。犇めく群集を蔽うあの闇に触れ、息絶えて、今にも燃え尽きるかのよう。

と、水面も表情をかえる。諳けさが輝きを失い、深みをましていく。遠い昔から、ほとりに叢がる人類に豊かな恵みを施してきた古い流れは、落日に広く悠然とやすらぎ、最果ての地に通じる水路の閑かな威厳を湛えて横たわっている。われわれが視ていたのは、際限なく繰り返すはかない一日の生々しい夕映えではなく、消えることのない壮大な記憶の光に揺らめく遙かな流れだった。まったく、海にあこがれ、「海に生きて」きた人間なら、テムズの河口に過ぎ去った猛者の姿を難なく認めるはず

だ。満ち干きを繰り返して、絶え間なく恵みをもたらす潮には、故郷のやすらぎに帰り、海の戦へと出帆した船と男の記憶が揺曳している。この流れは、イギリスが誇る数々の男たちを見守ってきた。サー・フランシス・ドレイクから、サー・ジョン・フランクリンまで、称号のある者もない者もみな騎士、海を渡り歩いた兵だ。暗夜に燦めく宝石のような船の数々をテムズは浮かべてきた。財宝を満載して帰還し女王陛下の光臨を賜った伝説のゴールデンハインド号、まだ見ぬ征服地に向かい二度と戻らなかったエレバス号、テラー号。この河は、船と男を視つめてきた。デットフォードから、グリニツチから、イギリスから出航した探検家、移住者、国王の船、商人の船、船長、提督、東方に向かう闇の「密売人」と東インド艦隊の「司令官」。黄金を夢み、名声に焦がれた男たち、剣を携げ、多くは松明を掲げ、こぞってテムズの流れにのった。この国の力を誇示し、聖火の輝きを伝えた者たち。あの引き潮にのつて一体どれほどのものが、まだ見ぬ土地の神秘に分け入ったことか。…男たちの夢、共栄圏の礎、帝国の予感。

日は没んだ。河面にゆうやみがあり、岸に明かりが灯りはじめる。ぬかるみに立つ三つ脚、チャップマン灯台が強烈な光を放つ。水路をはしる船の灯、おびただしい光の群れが行き交う。そして遠く西の方、上流の空に禍々しく残るあの巨大都市の標、残照に映える不気味な翳、星空の下に赫々と燃え立つ。

「そうしてここも、暗黒の地のひとつに違いない」マールロウが突然口を開いた。

われわれのなかで、いまも「海に生きて」いるのはマールロウだけだった。そのマールロウが船乗りらしくないと云えば失礼千万かもしれないが、マールロウは船乗りであるのに放浪癖があった。こういう云い方が許されるなら、大抵の船乗りはひきこもりがちな生活を送る。根が出不精で、船と云う家、海と云う故郷から離れることがないのだ。船はどれも似通

っており、海はどこまでも海である。まわりの環境に変化はなく、異国のなぎさも、異人の顔も、移りかわる多彩な生活も、神秘のベールではなく、かるい軽蔑のまなざしに翳んで、知らぬ間に過ぎていく。と云うのも、船乗りに神秘的なものであるとすれば、それは生死を操る女王であり、宿命のように底知れぬ存在である海でしかありえない。あとは、仕事を終えて辺りをぶらついた時、陸でひとしきり浮かれ騒げば、それでも大陸を隈なく探検した気分になり、しかもたいは探検するほどの値打ちはなかったと感じるのである。船乗りの話は単純素朴で、話の中身は胡桃を割った殻のなかにすべて収まっている。だが、マールロウは（長話をするとうとう一点を除いて）普通の船乗りとは違っていた。マールロウの伝えたいことは殻のなかではなく、殻の外にあつて、大切なことは光の周囲が茫と白むようにしか浮かび上がってこない。それは幽かな月明かりで、ときおりあの月の暈がぼんやり見えるのに似ていた。

マールロウの言葉にまったく違和感はなかった。いかにもマールロウらしく、言葉は黙って受け入れられた。冷やかす者さえいなかった。やがて、ひとときわゆるくりとした口調で、マールロウが語りだした。

「わしは遠い昔のことを考えていた、千九百年前、ローマ人が初めてここに来た頃、ついこの間のこと。…この河から光が流れ出したのは、それからよ。あんたさつき「騎士」と云ったか。そうかもしれん。だがな、そんなもん、野火が枯れ野を突ツ走るようなもんよ、稲妻が雲の中駆け抜けるようなもんよ。わしら、ゆらめく火影のなかに生きとる。この遙かな地球が減るまで、光消えんといいな。でもな、ここはついでの間まで、暗闇だった。何と云ったか、あの地中海の立派なガレー船、トライリウムか、あれに乗ってた隊長の気持ち、想ってもみ。北へ行け、いきなり命令されて、ガリアの地イ慌てて駆け抜けて、小さな船一個任されて。本に書いてあることが本当なら、手先も器用なたいした兵隊さんよ。ひと月やふた月で、そんな船を何百も造った云うじやないか。こ

こに来たとき、どんな気持ちだったろ、この世の果てよ、海は鉛色、空は煙の色、船はアコーディオンのように頑丈、あツという間にペしやんこになる、そんなのでこの河を遡^{のぼ}って行く、食糧とか兵隊とかいろいろ積み込んで。浅瀬、沼地、山林、未開人。文明人の口に合う物などま^ずない、飲み物云つたらテムズの水だけ。ファレルノワインもない、陸にも上がらん。あちこちで荒野らに駐屯地が埋もれていく、地を針で突くようなもんよ。寒い、霧が立つ、嵐が来る。病い、流刑、死。空にも、河にも、繁みにも、死の影がちらつく。ここで蠅^はみたいに死んでいったはず。いや、隊長はやり遂げた。それもおそらく見事にな、あれこれあんまり考えずに。いつか武勇伝聞かせたるぐらいのことしか考えなかつたと違うか。闇に立ち向かえる人間よ。もしかすると、いつかラベンナ艦隊に昇進できるかと思つて、目エ輝かしてたかもしれん。ローマにいい人脈があつて、あんな無茶な環境で、命落とさんかつたら話だけだな。あるいはな、トীগを纏^{まと}つたどつかのぼんぼんが、さいころ遊びに飽きたんだろ、人生変えよ思つて、どこかのお偉方とか、税関の役人とか、はては商人^{あきんど}の一行に混じつて、こんな処へ来てみたと考えてもいいかもしれん。沼地で船下ろされて、森の中行進して、奥深く入つた野営地で感じるんよ。野蛮だ、圧倒的な野蛮に四方取り囲まれてる、てな。森や、密林や、野蛮人の心の中で息してる、あの底知れない荒野らの世界。そんな得体の知れんもんのことなど、誰も教えてくれん。わけのわからんなかで、ぞつとしながら生きていかないかんのよ。しかも、何か心惹かれる処がある、じわじわと魂が奪われていく。怖いもの見たさつてあるな。後悔が募る、逃げ出したい、胸糞悪い、けどどうにもならん、降参よ、憎いイ、想つてもみ」

マールウはいったん言葉を切つた。

「でもな」片手を胸の前に上げ、掌をこちらに向けたマールウは、蓮の花はないが、ヨーロッパの服を着た釈迦如来が、胡坐をかいて説法を垂

れるような格好になつた。「でもな、わしらはちよつと違う。わしらには、効率と云うものがある。わしら、効率に身イ捧げとる。さつき云つた連中は底が浅い。開拓者ではないな、やっていたのは単なる略奪よ、それだけじゃないか。征服者。獣^{けだま}の力があればそれでいい、そんなもの、あつても自慢にならん。自分が強い云うことは、たまたま相手が弱い云うことよ。あいつらは奪^とれるもんがあるから筆りとつた。力づくでふんだくつただけ、たくさんの人殺して、罪深い、盲滅法にそんなことやつて。闇と格闘する人間にはもつてこいのやり方だけだな。地上の征服なんて、たいていは肌の色違う人間や、自分よりちよつと鼻ぺちやな人間から、土地を巻き上げることよ、あんまり近くで見たら、きれいでない。それが許されるのは信念があるから。抛つて立つ信念。薄っぺらな感情論ではない、信念。自分で築きあげたら頭下げて犠牲も惜しまない、身を挺して貫ける信念……」

言葉が途切れた。光が河面を滑つていく。赤と白と緑の光の粒が、追いつ追われつひとつになり、交叉し、そうしてゆつくりと、あるいは慌ただしく遠ざかつていく。大都市の往来は、夜が更けても眠らぬ河の上に続いていた。われわれは河面を眺め、辛抱強く待つた。潮が引くまですることはない。しかし、長い沈黙の後で、「憶えていると思うが、わしは一時期、河船に乗っていた」とマールウがためらいがちに切り出したとき、われわれは潮が引きはじめるまで、これといった結末もない、マールウの回想につきあされる運命にあることを悟つたのである。

「何もわしのことを話して、あんたらにつまりあん思いさせるつもりはない」そう語りだしたマールウの言葉には、とかく相手を置き去りにしがちな物語る人の難点が透けてみえた。「ただわしがあの後どんな心地になつたか、それをわかつてもらうには、どうやってあそこへ行つたか、何を見たか、あの気の毒な男に出逢つた場所まで、どんなふうにあの河を遡^{のぼ}つたか、知つてもらわんといかん。あんな奥まで船を進めたのは最

初で最後、わしの人生の山だった。何か光のようなものが、自分のまわり隈なく照らした気がした、心の中まで照らされたような気がしたんよ。ただ、あれは暗がりでもあった、切なくての、大事件が起きたわけでも、はつきり何か起きたわけでもない。そう、ぼんやりしとる。でもな、何か光のようなものが射してきた気がするんよ」

「憶えていると思うが、わしはあの時、ロンドンに戻ってきたばかりだった、インド洋やら太平洋やらシナ海なんかを嫌と云うほど周つての、来る日も来る日も、東洋に漬かつて、六年かそこら。帰ってきてから、わしはぶらぶらしとった。あんたらの仕事の邪魔して、家押しかけて。あんたらの目エ開かせることが、天から授かった使命とでも思っていたんかの。しばらくは楽しかった。ただ、そのうち遊んでいるのにも飽きてきた。それで船探し始めたんよ。あんな無理難題はこの世にないな。船のほうで見向きもせんよ。そのうち、そんな宝探しにも飽きた」

「わしは小さい頃から地図が大好きだった。南米や、アフリカや、オーストラリア、何時間でも眺めての、探検の夢にすっかり現^まれ抜^ぬかしたとった。あの頃は、地上に未踏の空白地がたくさんあって、地図見てて無性に心惹かれる処があると（惹かれないとこなどなかつたけどな）そこ指さして、大きくなったらここに行くて云うとった。北極とか、今でも憶えている。ま、北極は行ったことないし、いまさら行こうとも思わん。魅力がなくなつてしまった。赤道あたりや、それこそ両半球のいろんな緯度に、そんな場所が散らばっていた。実際に行つた処もある。……でも、その話はやめとこ。ただな、まだひとつ胸を焦がした場所があつた。最大の空白地、云つてみれば一番真ツ白なとこよ」

「たしかに、もうあの頃には真ツ白ではなかつた。大人になる頃には、河や湖や土地の名前で埋まっていた。もうロマン掻き立てる空白ではない、子がきらきらした夢を描く、白い土地とは違っていた。あれは、暗黒の地になっていた。でもな、わしは地図のなかの一本の河に目を奪わ

れた。どでかい河、巨大な蛇がとぐる解いたような格好、海に頭突つ込んで、だだっ広い土地に胴体うねらせて、尻尾は奥地に消えとる。店先の飾り窓でその地図を見ていたら、その場動けんようになった。蛇を見て竦みあがつた鳥のよう。阿呆な小鳥よ。それで思い出したのが、その河で取引している大きな会社。畜生、こんなどでかい河なら船使わんと商売にならんと気づいた。蒸気船。蒸気船の船長になつたらいい。わしはフリート街を歩いてたが、その考えが頭を離れなかつた。蛇に魅入られたんよ」

「わかると思うが、大陸の会社よ、その貿易会社。でもな、大陸には親戚がたくさんおる。生活費も安くて、それほど悪い処ではないらしいんよ」

「恥かしい話だが、わしは親戚に頭下げた。ここからして、それまでのわしと違うな。わしはそんな人間ではなかつた。いつだって自分の道を歩いてた、気の向くままに、自分の脚で。自分が信じられん思いがした。でもな、その時は何が何でも行かないかんと思つたんよ。それで頭下げた。男どもは「いや、マールウ君」て云つたきり、何もしてくれん。それで女に当たつてみた。信じられるか。このチャーリー・マールウが、仕事欲しさに女に動いてもらつたんよ。まったく、信じられんの。ひとつの思いが、わしを衝き動かしていた。叔母がいてな、熱血おばさんよ。手紙くれた。「素晴らしいことだと思ひます。何が何でもお手伝いさせて頂きます。立派な志です。知り合ひの奥さんの旦那様は、本部のかなり上の人です。相当地に顔の利く方も知っています」云う具合よ。わしが蒸気船の船長になりたいんなら、船長になるまでせつつき続けると云う勢いだつた」

「そうよ、仕事は決まつた。しかも、あつという間にな。会社で雇つていた船長が一人、現地人と取っ組み合ひの喧嘩して死んだ云う知らせが入つていたらしい。ついてたな。ますます行きたい思いが募つた。ずつ

と後になって、わしは船長の亡骸捜しに行ったが、その時初めて、そもその事の起こりが、鶏めぐる行き違いだったと聞いた。そう、二羽の黒い雌鶏。船長はプレスレーベン云うデンマーク人で、取引で何か汚いことされたと思つたらしい。それで陸に上がつて村長を棒で殴り始めた。いや、こんな話を聞いても、わしはちつとも驚かなかつた。二本足で歩いた動物のなかで、あんな物静かで、優しいのは見たことなかつた云う話を聞いてもな。きつとそうだったんだろ。でもな、船長はかれこれ二年くらいあつちにおつた、熱い理想に燃えての。ついに耐えかねて、どうにかして自分の尊厳守らないかと感じたんじゃないか。だからこそ、死に損ないの黒ン坊を容赦なく叩きつけた、たくさんの村人が、凍りついて見とる前で。そのうちある男が、これは村長の息子云う話だが、悲鳴上げる年寄りの姿見てられなくなつて、へつぱり腰で白人めがけて槍衝いた。そうよ、槍は拍子抜けするほどあつさり肩甲骨の間ぶち抜いた。村人は末代まで崇られる思つて、一人残らず森のなかに消えた。船長の船も、慌てふためいて逃げてしまつた、たぶん、機関士が操縦したんだろ。結局、わしが現地に行つて後を引き継ぐまで、亡骸のことなど誰も気にしなかつたらしい。わしはそのままにしておけんかつたけどな。ただ、ようやく対面した船長は、肋骨の間から生い繁つた草の陰になつた。骸骨が、そのまんまの形で残つていた。斃れた後はあつちの世界、誰も手エ出さん。しかも、村には人影がない。掘ッ立て小屋が、真ッ黒な口を開けて朽ち果てていた、どの家も傾いて、倒れた柵に囲まれて。確かに祟りがあつたんよ。村人は消えた。頭おかしくなるような恐怖で、男も、女も、子も、森のなか散り散りになつて、二度と帰つて来なかつた。あの雌鶏も、どうなつたのかの。進歩の掛け声に、押しつぶされたと思えばいいんかの。ただな、このとんだ騒ぎのおかげで、わしはあつさり職を得た。願かける暇もなかつたくらい」

「わしは狂つたように準備に駆けずりまわつた。二日と経たないうちに、

海峡を渡つていた。雇い主に挨拶して、契約書にサインするためよ。街にはほんの数時間で着いた。あそこへ行くと、いつも真ッ白な墓石を想い出す。嘘で塗りかためた街。もちろん偏見だけだ。会社はすぐに見つかった。街で一番大きいのが、その会社だった。話した人間は、みんなその会社のことで頭が一杯よ。海の向こうの帝国を支配して、貿易で巨万の富を築こうとしていた」

「暗い影の射した人影のない路地、背の高い建物、錠戸を鎖ざした数え切れんほどの窓、息絶えたような静寂、石の間から草が芽エ出しとつた。右と左に馬車を通る立派なアーチ、両開きの巨きな扉が重たげに少し開いて。わしは隙間のひとつから身イ滑り入れて、階段を昇つていった。掃除は行き届いているが、飾りが無い、砂を噛むように味気ない。最初にぶち当たつた戸を開けた。女が二人、太つたのと痩せたのが、藁の椅子に座つて、黒い毛糸で編み物している。痩せたほうが立ち上がつて、わしのほうへまっすぐ歩いてきた、目は下向けて、編み物の手はとめん、夢遊病者と同じで、こつちから退かんとぶつかるんじゃないかと思はじめた瞬間、女は立ち止まつて顔を上げた。傘のカバーみたいに特徴のない服。女は何も云わずにくるんと向きを変えて、控え室までわしを案内した。名前を告げてから、部屋のなか見回した。真ん中に縦ノ木のテーブル、四方の壁際に特徴のない椅子、壁には大きな地図が輝いとつた。虹色で色分けした地図。赤が多かつたが、これはいつ見ても気分がいいの、あそこは立派な仕事をしとる。青もたくさんあつた。緑が少しあつて、橙がぼつぼつ、東海岸には紫もある。紫の処では、進歩の旗掲げた陽気な開拓者が陽気なビールを飲んでるんだろ。でもな、わしが行くのは、そのどれでもない。わしが行くのは黄色。奥の奥。あの河が蛇のようにならねっている。魂奪われて、致命的。ああ。ドアが開いた。現れたのは秘書らしい白髪頭、ただなんか気の毒そうな顔してな、痩せこけた人差し指で、わしを奥の密室へ招き入れた。薄暗い室内、重厚な机が部

屋の真中にうずくまっている。その机の向こうから、蒼白い丸々したもんがフロック着て出てきた、そんな感じがしたの。それがお偉いさんだった。背は百六十七、八か。この人が数え切れんほどの人間操ってんのよ。握手して、きつと握手だったんだろ、何かもごもご云って、わしのフランス語誉めて。ボンボヤアジュ」

「たぶん四十五秒後には、あの気の毒そうな顔した秘書とさっきの控え室に戻っていた。わしが気の毒で仕方がない云う惨めな顔しての、ここにサインしてくれと。企業秘密は喋らん云う誓約書もあつたはず。そうだな、ここでも喋らんとこな」

「わしは少し不安になってきた。わかると思うが、堅苦しいことは肌に合わん。それに何か、嫌な空気が流れていた。陰謀云うのか、何か良くないことに手エ藉しているような気がしてきたんよ。部屋を出たときは、ほつとした。外の部屋では、例の二人が夢中で黒の毛糸を編んどる。どんどん人が来て、若い方が行ったり来たりして案内する。年取つたのは、椅子に腰掛けたまま、布のスリッパ履いた足を足あぶりの上に乗つけて、膝の上に猫が丸まっとる。糊で固めた白いもん頭に被って、片頬に疔、鼻先に銀縁眼鏡。わしのほう、上目でちらっと視た。その一瞬の、醒めた眼の謔げさに、わしは心を乱された。へらへらした若造が二人、目の前を案内されていく、その若造にも、見んでもわかる云う、同じ視線をちらっと向けるんよ。若造のことも、わしのことも、全部わかっていると云う顔だった。ぞつとした。忌まわしい、不気味な婆アだと思つた。あの二人のことは、あつちへ行つてからも、ときどき考えた。闇の門番よ、黒い毛糸を編んで、暖かい棺掛けでもつくつていたのか、一人は案内役、次から次にわけのわからん処に案内して、もう一人は年喰つた醒めた眼で、へらへらした間抜け面を觀察している。闇の編み物婆さん万歳、わしら立派に死んでまいります。あの眼で視られて、またあの顔拝めた者はそう多くないはず、絶対に半分もない」

「まだ医者者の検査が残っていた。「形だけのものですから」そう秘書は云つた。わしの辛さはよくわかっていると云う顔して。そのうち、左の眉先まで目深に帽子被つた男が、たぶん事務員よ、会社には事務員がおる、会社と云つても、墓場みたいな寂^{しん}としてたがの、そいつがどこからか降りてきて、わしを案内した。くたびれた服を着た、だらしのない兄ちゃん、上着の袖にインクの染みつけて、よれよれの大きなネクタイぶら下げて、あごの形が履きつぶした靴の先っぽのよう。診察まで少し時間があつたので、一杯やらんかと持ちかけた。そしたら嬉しそうな顔しての。腰掛けて一緒にベルモット飲んでいたら、この会社は立派な仕事しとると抜かしはじめた。わしは驚いてな、それなら何であつちへ行かんのか、頃合見計らつてそれとなく訊いてみた。そしたら急に真顔になって、「プラトン、弟子に曰く。余は見かけほど馬鹿ではない」偉そうにそう云い捨てて、腹決めたように、一気にグラス飲み干した。それで二人とも腰上げたんよ」

「年配の医者、わしの脈を取つたが、どうみても上の空だった。「大丈夫、これなら行ける」て呟いての。それから何か真剣な顔して、頭の大ささ測らせてくれと云い出した。かなり面喰らつたが、わしが頷くと、コンパスみたいなもの取り出してきて、前から後ろから、いろんな角度で頭の寸法とつて、几帳面にメモしていく。無精ひげ生やした、背の低いじいさんで、裾の長いよれよれの上っ張り着て、つつかけ履いとつた。害のない変人だと思つた。「向こうへ行く人には、研究のためにいつも頭蓋骨を測らせてもらうことにしている」「帰つてきたら、また測るんですか」「いや、帰つてきたのはいい。それに変わつてしまふのは頭のなかのほうだ」そんなことを云つて、たわいない冗談みたいに鼻で笑うんよ。

「君もあつちへ行くのか。たいしたものだ、いや面白い」わしのほうじろろ視て、またメモをとつた。「家族の中で気違いが出たことは」事務的に訊かれて、こつちはムツとするわ。「それも研究のためですか」て訊

いたら、わしが腹立てているのも気づかず、「現地へ行つて、一人ひとりの精神の変化を研究できれば、科学的に有意義だと思ふが……」「精神科の先生ですか」遮って訊いたら、この変人、何喰わぬ顔で「医者とは、えてしてそう云うものだ」と抜かした。「ちよつとした仮説を考えていな、向こうへ行く君たちが証明に一役買ってくれるはずだ。この国はあんな立派な植民地を支配して、これから潤っていくのだから、私の取り分はこんなものだ。金銀財宝は他の連中にくれてやる。いろいろ訊いてすまんが、イギリス人を診るのは初めてでな……」わしは慌てて、自分はどう考えても普通のイギリス人ではないと云つた。「普通のイギリス人だったら、先生とこんな風に話してません」そしたら笑つて「なかなか深いことを云う。だが多分間違いだ。直射日光もいかんが、苛々するのはそれ以上はいかん。ではまたな。イギリスでは何と云うのか。え、グツバイ、ああグツバイだ。ではな。熱帯で一番肝心なのは、かつかないことだ」……人差し指を立てて念を押した……。「落ち着いて、落ち着いて、ではな」

「もうひとつ、仕事が残っていた、あの偉い叔母さんに、挨拶しておかないと。叔母は得意満面だった。お茶淹れてくれて、あの後しばらく、まともなお茶は飲めなかつたの。まあとにかく落ち着いた感じの部屋で、いいとこの奥さん家の客間を絵に描いたよう。暖炉のそばでしみじみ話し込んだ。いろいろ内輪話していたら、わしのこと、ものすごい有能でそうは見つからん拾い物だと、重役の奥さんや誰や彼やに触れまわっていたことがわかつてきた。参つたの。わしは河を行ったり来たりするつまらん蒸気船に乗りに行くんよ、子供だましの汽笛がついた。いや、それにしても、わしも知らん間に、海外奉仕隊云うのか、あれの仲間入りしとつた。未開の地に光届けるとか抜かした、十二弟子の下っ端みたいなやつ。丁度そういう出鱈目が、活字になつて世間騒がしていた頃。あんないんちきがまかり通つた世の中で、あの偉い叔母さんも、足すくわ

れたんだろ。「あの無知蒙昧な未開人を救うのよ」とやりだした。いや、わしは段々嫌気がさしてきて。会社は金儲けしとるんだと、水を向けてみた」

「そしたら「チャーリー、忘れたの、働く人には報酬を受ける権利があるのよ」明るい声でそう云つた。女と云うものは、どうしてああ現実が見えんのか。自分で拵こしらえた世界に生きとるんよ。そんなもの、この世にあつたためしのない、ありえん世界よ。あんまりきれいすぎる。そんな世界を拵こしらえたところで、一日目の夕方にはもう粉々よ。わしら男が、この世のはじめからずっと文句も云わんと生きてきた忌まわしい現実が、頭もたげて何もかも台無しにしてしまふ」

「それからわしは肩を抱かれて、ネル着ていくのよ、ちゃんと手紙書くのよなどと云われて、叔母の家を後にした。表に出ると、なぜかわかんが、自分は詐欺師ではないかと云う妙な感覚に襲われた。どうしたんかの。わしは一日前に云われれば、普通の人間が道を渡るより簡単に、世界のどこへでも出かけていく男よ。それが一瞬、迷いが生じたとは云わんが、どきツとして足が止まった、こんな毎度のことを前にして。何と云えばいいんか、わしがこれから行くのは、大陸の奥ではなくて、地の底ではないか、一瞬そんな思いが胸をよぎつたんよ」

「わしはフランスの汽船で出発した。船は向こうにある港、ひとつひとつ馬鹿丁寧に泊まつていく。見た限りでは、兵隊と税関の人間を下ろすことだけが目的だった。わしは海岸を眺めとつた。流れていく風景を船から見ていると、謎解きでもしてるような気がしてくる。そう、目の前を過ぎていく、微笑んだり、睨にらんでたり、手招きしてたり、堂々としてたり、寂しかったり、詰まらなかつたり、荒れていたり。どこもじつと押し黙っているが、こつち来て覗いてみ、て囁かれていますような気がしてくる。今度は何か無表情な陸も見えてくる、まだ形になつてない云うような、のっぺらぼうで不気味なところ。巨大なジャングルの縁へり、緑が

濃くて、もうほとんど黒、それが白い波に縁取られて、どこまでも、どこまでも、定規で引いた線みたいに一直線に伸びている、碧い海に沿って。海の上には靄が匍う、きらきらした海がかすんで見える。強烈な陽射し、陸は蒸気で艶めいて、しずくが垂れるかのよう。処々に灰色ッぽい白ッぽい点々が見えてくる、白い波の内側で肩寄せ合って、上空に旗のようなものがひらひらしている。何百年も前からある入植地。後ろに拡がる手つかずの森に比べたら、地を針で突いたようなもん。船はがんがん進んでいく、泊まっては兵隊下ろし、進んでは税関の人間を吐きだしていく、神さまが見放したような荒野らで、税金取り立てるんよ、トタン屋根と旗ざおが埋もれているような処で。船はどんどん兵隊下ろしていく。多分、税関の人間を守る兵隊さんよ。波打ち際で溺れるのもいるらしいが、別に誰も気に留めんようだった。ただ放り出しては、先へ進んでいく。何日経っても同じ景色、動いとらんみたい。それでも、いろんなところを通り過ぎた、交易地、グランバサムとかリトルポポとか、不気味な背景幕垂らした、安っぽい道化芝居にでも出てきそうな名前。わしは船に乗っているだけではない、何の接点もない男たちの中で一人ぼっちよ、油の浮いた退屈な海、暗い海岸がどこまでもつづく、そのうち、重苦しい意味をなさない妄想にとりつかれて、現実から隔てられたような気がしてくる。ときどき聞こえてくる潮騒がいい楽しみだったの、同胞の声を聞いているみたいだった。何か自然で、自然には自然の道理がある、筋が通っている。ときどき岸から漕ぎ出してくる舟が、現実との貴重な接点だった。黒人が漕ぐ舟。遠くからでも、ギョロギョロした白い目ん玉が見える。叫び声あげて、唄歌って、全身から滝の汗流して、うす気味悪いお面みたいな顔したあいつら。でもな、あいつらには骨がある、肉がある、たくましい生命力に、躍動感がみなぎっている。岸に打ち寄せる波くらい、自然で現実味があった。ただあるがままにそこにおるんよ。見ていて心底ほっとした。まだすんなりわかるま

もな世界にいる、束の間だがそう思えたの。でも、そんな思いは長くは続かん。すぐに何かが見れて、吹き飛ばされる。今でも憶えてるが、一度、沖合に錨下ろした軍艦に出喰した。掘ッ立て小屋ひとつない森のなかに、大砲ぶちこんどるんよ。フランスがそこでも戦争しとつたらしい。軍旗がぼろきれみたいにならんと垂れて、船腹の下面に細長い八インチ砲が突き出していた。油でぬらぬらした海が、軍艦をだるそうに持ち上げては落とす、その度に細いマストが傾いた。海と空と大地がどこまでも広がっている何もないとこで、大陸に向かって大砲ぶちこんどるんよ。わけがわからん。八インチ砲がポンツと鳴る、小さい火が噴いて消える、うっすら立った白い煙が見えなくなる、ちっこい弾が情けない音立てて飛んでいく。何も起きん。起きるわけがない。どこか気違ひじみた光景だった、哀れなピエロを想い出す。同じ船の男が、こっからは見えんが、どこかに未開人（そいつは敵と呼んでいた）の陣地がある、と真顔で説明してくれたが、わしは違和感をぬぐえなかった」

「船は軍艦に郵便物を渡すと、先へ進んでいった（あの可哀想な軍艦では、熱病で一日三人死んでいると云う話だった）。船はそうして、またどうしようもない名前をついた土地に泊まっていく。熱れた地下墓所にもいるような、土臭い澱んだ空気、死と金儲けの舞踏が能天気にく。荒波が牙を剥く不気味な陸、自然が余所者を拒んでいるような処をどこまでも。海から河へ、河から海へ。生きながら死んだ河、朽ち頼れた河べり、粘ついた泥水が捻じれたマングローブを侵していく、あれはどうしようもない絶望で半狂乱になって、こっち見て身イ擦らせているようだった。どこもただ通り過ぎただけで、はつきりとした印象はない。ただ、何かそこはかとなない、漠然とした畏れで息苦しくなった。悪い夢を見ながら、しんどい霊場巡りでもしている気分だった」

「一ヶ月以上経って、あの巨大な河の河口が見えてきた。船は首都の沖合に錨を下ろした。ただ、わしの仕事はそこから二百マイル奥に行か

んと始まらん。支度が整うと、まず三十マイル上流に向けてすぐに出発した」

「今度の船は航海用の小さな蒸気船だった。船長はスウェーデン人で、わしが船乗りだとわかると、操舵室ブリッジに呼んでくれた。色白の痩せた兄ちゃん、とつつきにくい感じがしたの。だらしなく髪伸ばして、跛びっこをひいていた。気が滅入るような小さい波止場を離れると、「あそこにいたんかい」と陸をあごでしゃくる。「まあ」「たいした連中だ、あの役人連中、なあ」驚くほど正確な英語で皮肉たつぷりにそう云った。「面白いもんだ、月に数フラン稼ぐために、あんなことをするなんて。ああいう連中が奥地に行ったら一体どうなるのか」それをこれから見に行くんだと云うと、「ええッ」と叫んだ。足を跛きずって操舵室を横切る間も、片方の目はいつも前を警戒している。「気をつけたほうがいい。この前乗せた人は、あつちで首吊つたから。あの人もスウェーデン人だったが」「首吊つたつて、何でッ」わしは叫んだ。男は相変わらず前方から目を離さない。「さあ、太陽に参ったのか、この国に参ったのか」

「ようやく視界が展けた。岩壁が現れて、河べりに掘り返した土の山、高台に小屋、他にも発掘現場みたいな荒れ地の真ん中や下り坂にしがみつくように、トタン葺きが並んでいる。ゴーツと云う上流の轟音が、この人の棲む廃墟を壓していた。大勢の人間が蟻んこみたいに動きまわつとる、ほとんどが裸の黒人よ。突堤が河に突き出していた。時々陽が思い出したようにぎらッと照りつけて、刺すような光で目の前の何もかもが真ッ白になった。「あそこが、あんなの会社の営業所だ」スウェーデン人の船長が指さした。岩山に、バラックみたいな小屋が三つ並んでいる。「荷物は後で運ばせる。四箱だったな。じゃあまた」

「歩いていくと、草むらにポイラーが転がっていた。岩山に続く径が見えた。径は、大きな岩と、ひっくり返って腹を出した小振りのトロッコを避けるように上っていく。車輪がひとつ脱とれたトロッコ。動物の死骸

のよう。他にも変色した機械や、錆びたレールが山になって落ちていた。左手に木陰があつて、何か黒い影が弱々しく動いた気がした。わしは目をしばたいた。径は急だった。右のほうで警笛がして、黒人が走っていくのが見えた。ズンと腹に響く猛烈な爆音で、地面が揺れ、崖から白い煙が上がった。それで、それだけよ。岩肌には何の変化もない。鉄道を敷いていたんよ。崖は邪魔でも何でもない。ただ、無意味な爆破作業だけが続けられていた」

「後ろのほうでカチッ、カチッ云う小さい音がして、わしは振り返った。黒人が六人、一列になつて苦しうに上がってくる。土が山盛りになつた小さい籠を頭に載つけて、背筋を伸ばして、ゆっくり歩いてくる、歩きたびにカチッ、カチッ云うんよ。黒い檻ぼろを腰に巻いて、後ろに垂れた布切れが尻尾みたいに揺れていた。肋骨あばらほねがきれいに浮きでとる、手足の関節が縄の結び目のよう。みんな鉄の首輪されて、鎖ひとつで繋がれている。歩きたびに撓たがんだ鎖が揺れて、一定のリズムでカチッ、カチッ云うんよ。崖のほうでまた爆音がした。わしはふと、大陸に向かつて大砲を打ち込んでいたあの軍艦を想い出した。同じ種類おんなの不気味な音だった。ただ、どう考えてもこいつらは敵には見えん。罪人おんな扱いされて。あの砲みたいに、阿漕な法律が飛んできたんよ、海の向こうから、わけのわからんものが。痩せこけた胸が、みんな苦しうに息しとる、大きく開いた鼻の孔が小刻みに震えている。目はじつと坂の上を見据えて、十五センチと離れてない処をわしには目もくれず、通り過ぎていく。屍しかばねのように、すべてに興味を失くした悲しい未開人。痛ましい光景の後から、文明の洗礼を受けた新勢力の落とし子が、とぼとぼ歩いてくる。ライフルの真ん中を持って、制服の上着のボタンがひとつ脱とれている。前方に白人の姿を見ると、慌ててライフルを肩に掛けた。あくまで念のためよ、白人なんて遠くから見ればみんな同じ顔しとる、わしが誰だかわからんからの。みるみる安心した顔つきになって、自分の受け持ちに目

エ遣ると、白い歯を剥き出して、にやつと下品に笑った。大役任された同僚^{なかま}同士とも思ったんかの。とどのつまり、わしもこの大層な理想を掲げた立派な大事業の歯車よ」

「わしは坂を上るのをやめて、左の方へ降りていった。あの繋がれた囚人が見えなくなつてから行こうと思つた。わかると思うが、わしは別にやわな人間ではない。突っかかつて、身イかわして生きてきた。歯向かつてな、歯向かう手段はいくらかもあるのに、時には後先のこともよく考えず、殴りかかつて生きてきた。あんな生活に足を踏み入れてしまったから仕方がない。わしは凶暴な悪魔を見てきた。慾の塊みたいな悪魔、本能剥き出しの悪魔を見てきた。でもな、結局人間を衝き動かしているのは、そういうしたたかであくましい、目の血走つた悪魔よ。人間なんて。ただ、わしはあの坂の途中で直感した。この土地の目が眩むような陽射しの下では、だれ切つて、うわべだけは取り繕つた、目のよく見えん悪魔が、慾に憑かれて血も涙もない悪行を重ねている、自分はそういう悪魔と顔を突き合せることになる。そういう悪魔がどれだけ陰險か、それも何ヶ月か後に、一千マイル奥地で思い知つた。虫の知らせか、わしは一瞬ゾツとして、立ち竦んだ。それからようやく、さつき見た木立に向かつて、斜めに丘を降りていった」

「わしは誰かが掘りかけの不自然な巨きな穴を避けるように降りていった。何の穴だかよくわからん。石切り場でも、砂堀り場でもない。ただの穴。罪人に仕事を与えようと云う、人助けの目的で掘つたのかもしれん。よくわからない。穴を過ぎると、斜面の傷跡ほどの細い^{ほそ}谷間に落ちそうになった。移住のために持ち込んだ配水管が散乱しとる。壊れていないのはひとつもない。何の意味もなく叩き毀されていた。ようやく木立に辿りついた。わしはしばらく木陰をぶらついてみようと思つたんだよ。だが、なかに入つた途端、地獄の闇に足を踏み入れたような気がした。あの早瀬が近かつた。ゴーツと云う、抑揚のない、滾り落ちる急流

の響きが、木の下の闇の重苦しい静寂を満たしていた。空気が死んで、木の葉ひとつ動かない。地球の廻る轟音が、突然聞こえだしたかのような、異様な音が響きわたっていた」

「黒いものが蹲まっていた、倒れていた、樹々のあいだに身をかがめて、立樹に凭れて、地べたに這いつくばつて、小暗い闇に半ば埋もれ、半ば浮かび上がる、苦しみと、諦めと、絶望の極限の表現。崖のほうでまた爆音がして、わしは足の裏にかすかな揺れを感じた。仕事は続いていた。仕事。そこは手を藉した人間が、身を退いて息絶える場所だった」

「じわじわと最期が近づいている、それだけは確かだった。敵ではない、罪人でもない、もうこの世のものでもない。緑蔭^{こかげ}の下で混乱して横たわっている、飢えと病いの黒い影にすぎん。ここかしこの海岸から年季契約を盾に連れてこられ、慣れない環境に戸惑つて、慣れない物喰わされて、身体こわして効率落ちたら、ようやく這いつくばつてきて休むことを許される。虫の息になつた今は、宙に解き放たれたように自由で、そうして今にも消え入りそうだった。葉の下かげに、眼の光が見えてきた。下を向くと、手のすぐそばに顔がある。黒い骸骨が、樹に肩先を凭せて、まっすぐ横たわっていた。伏せたまぶたがゆっくり持ち上がる、落ち窪んだ眼がわしを見上げる、力のない巨きな眼、もうほとんど何も見えていない、一瞬^{ひとまひ}眸の奥に宿つた白い光も、ゆっくり消えていった。まだ若い男のよう、子供と云つてもいいの、ただあいつらの年齢はよくわからん。わしには、あのスウェーデン人の兄ちゃんからもらった堅パンをポケットから差し出すくらいしかできなかった。指がゆっくり近づいてきて、堅パンをつかむ。それ以外に動きはない、視線も上げない。首に白い梳毛糸^{けいと}の切れ端が巻いてあった。なんでこんなものが。どこで手に入れたのか。何かの記章^{しるし}か、首飾りか、呪^{まじな}いか、御守りか。何か意味があるのか。海に向こうから来た白の毛糸の切れ端が、黒い首に巻いてある、何か異様な光景だった」

「その樹の近くには、まだふたつのひん曲がった骨が、膝を抱えて座っていた。片方は膝の上にあごを乗つけて、何も見えない眼球をさらしている。目を掩いたくなるようなおぞましい光景。もうひとつの仲間の亡霊は、精根果てたように膝に顔をうずめている。そうして、ほかにも、そこら中に、いろんな格好で身を撻じって倒れる影が散らばった。大虐殺や疫病の絵エミみたいに。恐怖に戦って立ちつくしていると、そのうちのひとつが手と膝をついて、四つん這いで河の水を飲みに行く。片手で掬って水を飲むと、胡坐をかいて光のなかに上体を起こした。そうして、羊のような毛むくじやらの頭を、胸骨むなほねのうえにガクツと落とした」

「もう木陰はたくさんだった。わしは急いで営業所に向かった。建物のそばで白人に出喰わしたが、これが思いも寄らん優雅な格好で、一瞬間でも見たかと思つた。糊のきいた高い襟、白のカフス、アルパカの薄手のジャケットに、目の醒めるような白のズボン、きれいなネクタイ締め、靴はぴかぴか。頭は櫛で分け目入れて、油をつけている。帽子は被つとらん。頭の上にはみどりの縞々の日傘、大きな青白い手で差して。わしは呆気にとられた。耳のうしろにはペン軸」

「わしはこの奇跡と握手をした。こいつは会社の主任会計士で、この営業所で帳簿を全部つけているらしい。「ちよつと新鮮な空気を吸いに」表に出てきた、そう云つての。傑作よ。日がな一日、部屋の中で机に向かつているんだろ。別にこの会計士の話はどうでもいいんだが、ただあの頃の想い出と分かちがたく結びついたあの男の名を、こいつの口からはじめて聞いたからの。それにわしはこの男を尊敬した。そう、あの襟、あの大きなカフス、櫛を入れたあの髪を尊敬した。まったく床屋のマネキンみたいな格好だが、何もかもが億劫になるこの土地で、きちんと身なりを保っている。骨のある男。ピンと立った襟とめかしこんだシャツの胸に性格が滲み出ている。こつちに来てもう三年近くになると云っていた。どうしてもそんなきちんとした格好ができるのか、後で訊か

ないわけにはいかなかった。会計士は一瞬間を赧らめて「土地の女に営業所の仕事を教えているんです。大変でした。仕事が嫌いで」遠慮がちにそう云った。この男は確実に何事かをなし遂げていた。それに、整然と並んだ帳簿に情熱を注いでいた」

「帳簿以外は、何もかもごちゃごちゃだった。人も、物も、部屋も。踏み広がった趾あしをした埃まみれの黒ン坊が続々と来ては去っていく。安物のコットン、ビーズ玉、真鍮の針金、量産品が次々と闇の奥に消え、貴重な象牙になって、ぼつぼつ戻ってきた」

「わしはその営業所で十日待った。気の遠くなるような時間。敷地のなかの小屋に寝泊りしたが、雑然さに耐えられず、ときどき会計士の部屋に逃げ込んだ。板を水平に渡した壁は造りが雑で、高い机にかじりついた会計士の身体には、首筋から踵まで細い光の縞ができた。大きな鎧戸を開けなくても外が見える。中も暑かった。巨大な蛇が凄まじい羽音を立てて飛び回っていた。蛇は刺さんが、噛みついた。わしはたいいてい床に座っていたが、会計士は完璧ななりで高いスツールに腰掛けて（香水の匂いさえかすかに漂っていた）、仕事、仕事。ときどき立ち上がって運動をする。病人を乗せた車つきのベッドが運び込まれたときは（奥地で身体こわした駐在員よ）、少し嫌な顔をした。「この病人の呻き声で気が散るんです。「こういう気候では、集中しないとすぐにミスをしてしまう」」

「ある日、会計士は顔も上げずに「奥地に行ったら多分クルツさんに会いますよ」と云った。クルツさんとは誰なのかと訊くと上級駐在員だと答えた。物足りない顔を見ると、ペンを置いてゆっくりこうつけ加えた。「とても凄いい人です」いくつか質問すると、今は象牙取引の最前線でも重要な営業所を任されていると云う。「あの奥深くから、他の駐在員を全部合わせただけの象牙を送ってくるんです……」会計士は仕事に戻った。病人はかなり悪化したらしく、もう呻き声も出なかった。平和な

静寂のなかで、蛇の羽音が響いていた」

「突然、人の立ち騒ぐ声が近づいてきた。地響きのような足音。隊商の到着。わけのわからん言葉かけたたましくがなり立てる声で、壁の向こうが一気にどよめいた。口々に喚き散らす人夫、凄まじい騒音のなかで、この日二十回目の「もうだめだ」を洩らす会計士の悲痛な涙声……。会計士はおもむろに立ち上がった。「なんて騒がしいんだ」部屋を横切つて、そつと病人の様子を見にいくと、戻つてきて「聴こえてないみたいですよ」と云つた。わしは驚いて「何ッ、死んだのかッ」と訊きかえした。「いえ、まだです」落ち着き払つてそう云つた。それから中庭の喧騒に顔を向けて、「間違いが許されない仕事をしていると、ああ云う野蛮な連中は嫌になります。死ぬほど憎い」しばらく考え込んでまた口を開いた。「クルツさんに会つたら」机の上に目をやつた。「こちらはすべて順調だと伝えてください。手紙は出したくないんです。ああいう連中に手紙を預けても、あの中央営業所で誰の手に渡るかわかりませんし」そう云つて、ギョロツとしたおとなしそうな目で、じつとわしを見つめた。「いや、クルツさんはものすごく出世しますよ。そう遠くないうちに本部の人間になるはずです。上のほう、欧州本社もそのつもりなんです」

「会計士は仕事に戻つた。外の喧騒はやみ、わしは表に出ようとして戸の前で足を停めた。国に帰される病人は、蛇の唸る音が延々と続くなかで、真ツ赤な顔をして意識を失っている。もう一人の男は帳簿にかじりついて、ひとつも間違いのない取引をひとつも間違いなく記入している。そうして、脚下十五メートル下には、あの動かぬ死の森の天辺が見渡せられた」

「翌日、ついに営業所を出発した。六十人の隊商を引き連れて、二百マイル歩いた」

「特にこれと云つて話すことはない。どこまで行つても、径、径。何も無い大地に踏み開けられた径が、網の目のように繋がっている。草深い

中を、燎かれた草の上を、低い木立を抜けて、寒気のする溪を、灼けた岩山を、下つて上がり、上がつて下りる果てのない径。寂しい、寂しい景色。誰もいない、小屋ひとつない。人はどうの昔に逃げ出していた。

わしらの国で云えば、恐ろしい凶器に身固めた得体の知れん黒ン坊が、デイルとグレイブズエンドを結ぶ街道を急にぞろぞろ行き来するようになったもんよ。そこらの田舎者を手当たり次第につかまえて、重い荷物を背負わせれば、人家や牧場はアツという間に空になる。あそこでは廢屋すらなかつたけどな。そう云えば、捨てられた村もいくつか通り過ぎた。頽れた草の壁が哀しいまでに稚拙だった。来る日も来る日も、後ろから重く疲れた百二十本の裸足の趾がついてくる、ひとり三十キロを背負つた百二十本の趾。野宿して、飯つくつて、眠つて、テント畳んで、歩く。ときどき、力尽きた人夫が道端の高い草の陰で眠りについとつた。傍らに転がった空の瓢箪と長い棍棒。大地と空は、寂と静まり返つて。たしか、静かな夜には遠くの太鼓が響いた。高く低く、広大に、かすかに。怪しく心を揺さぶる、狂おしい音、いろんな想いが胸をよぎる。きつと、耶穌教の国の鐘の音くらい、深い意味があるんだろ。ある日出喰わした白人、制服の前をはだけて、径の真中で野宿しとつた。武装した、ひよる長いザンバル人の護衛と一緒に、しらふだったが、ご機嫌で大歓待。道路の整備を担当していると云つたが、わしには道路も整備も見あたらなかつた。三マイル先で思いつきり躓いた中年の黒ン坊の死体、額に鉄砲の穴があいた、あれを道路の整備とでも云うんかの。わしには白人の連れがあつた。悪い奴ではないが、かなりの肥満で、あと何マイルも日蔭も水も何もない炎天下の上り坂で、氣イ失う悪い癖があつた。いい迷惑、息吹き返すまで、自分の上着を日傘のように顔に翳してやらんといかん。一体何でこんな処へ来たのか、訊かずにはいられなかつた。「金儲けのためさ、当たり前だろ。何だと思つているんだ」見下したように云う。そのうち熱を出して、棒でハンモックを吊るして運ぶ羽

目になった。九十キロの巨体、人夫たちと果てのない口論になった。動かない、逃げ出す、夜中に荷物ごといなくなる、結構な反乱。ある晩、仕方なく、身振り手振りの英語で訴えた。ずらっと並んだ百二十個の目玉が、わしの一挙一動を見守っていた。次の朝はハンモックを先頭に順調に出発した。一時間後、すべてが藪のなかに沈没していた。連れ、ハンモック、呻き声、毛布、可^{おそろ}恐しい光景。哀れな連れは、あの重たい棒で鼻を擦りむいていた。あいつを殺せと叫んだが、辺りには人夫の影も形もない。あの年配の医者^{おそろ}の言葉を想い出した。「現地へ行って、一人ひとりの精神の変化を研究できれば、科学的に有意義だと思うが」わしの頭のなかも科学的に有意義になっているのだろう。ただ、そうなったところで何の役にも立たん。十五日目、またあの巨大な河が現れた。わしは疲れた足を引きずって、中央営業所の敷地に入った。営業所は濶みに面した林の中にあつた。結構な環境、一方は臭いぬかるみに面し、残り三方はいびつな藪草の囲いに囲まれている。伸び放題の垣根の切れ目が唯一の出入り口、だれ切った悪魔がここを管理しているのが一目でわかる。建物の間から、長い棍棒を持った白人の男らがだるそうに出てきて、ぶらぶらこつちを見に来たが、またどこか見えなくなった。そのうちの黒い口髭生やした血の多い大男は、わしが名前告げると、すぐさままくし立てるように喋りだし、あちこち脱線した挙句、わしの蒸気船が河底に沈んだと云つた。わしは仰天した。エッ、何でッ、どうして。いやあ「大丈夫」「支部長さんだつて」一緒だつた。全然問題ない。「みんな頑張つた、ほんとに頑張つた」大男はわしを急かした。「すぐに支部長さんの処に行ったほうがいい。あんたを待っている」

「本当のところ、あの沈没が一体何を意味するのか、すぐには呑み込めなかつた。今はわかっているつもりだが、確かなことは云えん、全然。今になって考えれば、完全に人を馬鹿にした話で、どう考えても不自然よ。ただ……。どちらにしても、そのときはとにかく面倒なことになつ

たとしか思わなかつた。蒸気船は沈んでしまった。二日前、連中は突然上流に向けて慌ただしく出発した。支部長も一緒に、誰かが船長役を買つてたが、三時間も経たんうちに、船の底を岩でこすつた。船は南岸のそばに沈んでしまった。わしの船が沈んだら、わしは一体ここで何をやるんよ、そう思つた。ただ、実際には河底から相棒を引き上げると云う大変な仕事^{おそろ}が待つていた。早速、次の日から取り掛かる羽目になつた。ばらばらになつた船を引き揚げて、営業所に運んで修理するのに、何ヶ月もかかつた」

「支部長に着任の挨拶をしたが、何かが変だつた。朝から二十マイルも歩いてきたのに、座れとも云わん。見た目も普通、肌の色も普通、仕草も声も普通。中肉中背。ありふれた青い眼だけが、際立つて冷たい感じがした。斧のように重い冷たい視線を容赦なく人に振り落とせる男、それは確かだが、ただ、そういう時でさえ身体のほかの部分^{おそろ}は、そんなつもりはないと云つていような気がした。あとはただ、云いようのない微かな唇の動き、見た目にはわからないほどの笑み、笑みでもない。今でも目に浮かぶが、説明できん。無意識なんよ、その笑み、ただ何か云い終わったすぐ後に、ふつと唇に広がる。何か云い終わつて、言葉に封をするみたいに。あの笑みがくると、何の変哲もない言葉が、まるで謎めいたものに思えてくる。平凡な営業マンで、若い頃からこつちで働いてきた。それだけの男。みんなこの男に従つてはいたが、好かれても、怖がられても、尊敬さえもされていなかった。何か人を不安にさせる。そう、それよ。不安。見るからに信用できないわけではない、ただ何となく人を不安にさせる、それだけ。そう云う……そう云う……力にどれだけ威力があるか、きつとわからんと思う。組織をまとめるとか、新しいことをはじめるとか、指示を出す能力さえ、特に優れていなかった。それは例えば、営業所の悲惨な状況をみればわかる。学歴もない、頭が切れるわけでもない。でも、今の地位を得た。なぜか。たぶん病気にな

らなかつたからよ……。現地で三年の任期を三回務めて……。誰もがばたばた倒れる環境では、圧倒的な体力がそれだけでひとつの力になる。休暇で国へ帰ると、仲間とかなり派手に騒ぐらしい、豪勢にの。陸に上がった船乗りのよう。ただ、それは表の顔にすぎん。普段話をしていれば、それはわかる。何か新しいことをはじめわけではない、ただ同じことを繰り返していられる。それだけ。それでも力を持っていた。何がこの男を動かしているのかわからないと云う、ただそれだけの理由で力を持っていた。自分では絶対にその秘密を明かそうとは思わない。結局、あの男のなかには何もなかったんだろ。そうは思ってみても、本当にそうかと云う声がある。あそこは外からは何もわからんからの。聞いた話では、いろんな熱帯病で営業所の駐在員がみんな倒れたとき（人形よ）、

「こんな処に来る人間は、中身など捨ててしまえ」と云つたらしい。そうして、心の闇に通じる扉を開けてしまったとでも云うように、あの笑みで言葉に封をした。見えたと思つたら封をされる。食事のたびに白人が席順でもめることに腹を立てたときは、巨大な丸テーブルを造らせて、特別な小屋まで必要になった。それが営業所の食堂。自分の座る処が上座で、あとはどうでもいい席。それがこの男の変わらぬ信念のように思えた。丁寧でも無礼でもない。静かな男。海岸から連れてきた必要以上に物を喰らう若い黒ン坊を「召使い」にしていたが、それが目の前で部下の白人に腹立たしいくらい傲慢な態度をとつても、何とも云わなかつた」

「支部長はわしの顔を見るなりいきなり話し出した。わしがなかなか来なかつた。時間がなかつた。わし抜きで始めなければならなかつた。上流の営業所を早く助けなければ。救出はただでさえ、かなり遅れている。誰が死んで、誰が生きているか、どうやって凌いでいるかさえわからな

い、云々、云々。わしの云うことには耳も貸さず、蜜蝋の棒をいじりながら、事態は「極めて深刻、極めて深刻だ」そう何度も繰り返した。非

常に重要な営業所が危機に瀕している、その所長のクルツ君が倒れたと云う噂がある。何かの間違いだといいが。クルツ君は……。わしは疲れて苛々していた。クルツなんかどうにでもなれ。支部長を遮って、クルツさんのことは下流で聞きましと云うと、「ああ、そうか、あちらでもクルツ君のことが」とつぶやいて、また喋りだした。クルツ君はうちのエースで、わが社になくはない貴重な人材だ。私の心配がどれほどか、わかるだろう。「不安で、不安で、仕方がない」支部長は確かに、椅子の上で見るからにそわそわしていた。そうして「ああ、クルツ君」と叫ぶと、持っていた蜜蝋を折ってしまった。自分でもびっくりしたようだった。それから今度は「修理にはどれくらい……」と訊いてきた。わしはまた遮った。こっちは腹へこで、しかもずっと立ちっぱなしよ、いい加減腹が立つてきた。「どうしてわしに、そんなことがわかるんです。まだ現場さえ見ていない。間違ひなく数ヶ月はかかりますよ」まったく無駄なやりとりとしか思えなかつた。「数ヶ月、そうか、三ヶ月でどうだ。三ヶ月後に出発する。それで片付くだろう」わしはぶつさき云いながら小屋を飛び出した（支部長は何かペランダのようなものがついた土壁の小屋に、ひとりきりで住んでいた）。能無しが、無駄口ばかり叩いて。ただ、あとになって、支部長が「片付け」にかかる時間をびつたり言い当てていたことに気づくと、わしは驚いて思い直した」

「次の日から、何と云うか、営業所に背を向けるように仕事に出た。現実を前向きに受け止めるにはそれしかないと思った。ただ、ときには周りも見渡さないといかん。そうしてわしが視たのは、あの営業所、あの敷地の陽射しのなかを当てもなくさまよう男らの姿だった。時々、これは一体何だと思つた。馬鹿げた長い棒を持って、そこらをうろつきまわる男ら。信仰とは縁のない霊場巡りの一行が、何かの呪文で、いびつな垣根に閉じ込められとる、そんな感じがした。象牙、象牙、あちこちから漏れ聞こえる囁き、溜息。まるで象牙に手エ合わせて拝んでいるよう

だった。血腥い欲望の臭いが、あたり一面に死臭のように立ち罩めていた。いや、それにしても。あんな異様な光景は人生で見たことがない。そうして四方には、針の先で突いた程のこの土地を囲む静まり返った荒野ら。圧倒的で太刀打ちできない、悪とかこの世の真理とか、何かそんなものが、この気違いじみた侵寇の消えてなくなるのをじっと待っている気がした」

「ああ、あの頃の生活。いや、気にせんでいい。いろんなことがあった。ある晩、キヤラコや更紗やビーズ玉やその他何か知らんが色々詰め込んだ藁の納屋が、いきなり燃え上がった。地が復讐の焰を噴いて、あのがらくたを焼き尽くしたかと思うくらい。わしは装備を外したわしの蒸気船の横で、静かにパイプをくゆらせていた。火の光のなかで、男らが手を挙げて騒ぎ回っていた。例の口髭の大男が、ブリキのバケツを持って大急ぎで岸に駆けてきて、「みんな頑張ってる、頑張ってる」て云いながら、河の水を一リットルくらい汲んでまた慌てて戻っていった。バケツの底に穴が開いているのにわしは気づいた」

「わしはぶらぶら歩いていった。急いでも仕方がない。納屋は燐寸箱のように燃え尽きていた。火のついたその瞬間から望みはなかったんよ。焰は高く舞い上がり、誰をもたじろがせ、辺り一面を照らして、そうして力尽きた。納屋はもう、激しく熾る炭の山となっていた。近くで黒ン坊が撲たれている。こいつがどうにかして火をつけたと云う。そうかもしれんが、黒ン坊は世にも可恐しい声で泣き喚いていた。それから幾日か、あれは小さな木陰に座っていた。かなり弱っていて、どうにか立ち直ろうとしていた。やがて、あれは起き上がって去っていった、荒野らの奥深くに、また音もなく吸い込まれていった。闇から光に近づいていくと、男二人がこちらに背を向けて何か喋っているのに気づいた。クルツと云う名前が聞こえ、「この不幸な事故を利用して」と云う言葉が耳に入った。一人は支部長だった。わしは支部長に挨拶をした。支部長は「あ

んなの見たことあるか、え、まったくひどいな」と云って立ち去った。もうひとりはその場に残った。若手の上級駐在員で、紳士的でちよっとおとなしめの男、鉤鼻で、短いあご髭が二股に分かれとる。他の連中は距離を置いていたの。周りは周りで支部長のスパイだと云っていた。

わしはそれまでほとんど喋ったことがなかった。わしらは話しながら、まだじりじり云っている焼け跡から少しづつ逸れていった。奴は部屋に寄っていかないかと云った。営業所の一番大きな建物の一室。燐寸を擦ると、この貴公子、銀の台座のついた化粧箱や、自分専用の蠟燭まで丸々一本持つとる。当時、蠟燭を使えたのは支部長だけだったはずよ。土の壁は現地の敷き物で覆って、戦利品の槍や投槍や盾や刀のコレクションが飾ってある。この男に与えられた仕事は煉瓦造り、わしはそう聞いていたが、営業所のどこを探しても煉瓦のかけらも見つからない。もうこちちに来て一年以上、ただ待っていた。何か足りなくて煉瓦が造れんらしい。何かは知らん。たぶん藁でも足りんのだろ。ともかく、何か足りない、欧州からも送ってくる気配はない。この男が一体何を待っているのか、わしにはわからなかった。もしかすると、煉瓦が突然現れるのを待っていたのかもしれない。ただ、ここでは誰もが、十五人だか二十人だかいる霊場巡りの誰もが、揃って何かを待っていた。しかも、わしは保証するが、あいつらの様子からして待つのは嫌でないようなんよ。待っていても病気しかこなかったけどな、わしの知る限り。あいつらは、馬鹿みたいに陰口を云い合ったり騙し合ったりして、時間をつぶしていた。あの営業所は陰謀の匂いがしたが、ただ、もちろんそれでどうなったわけではない。営業所だけでない。慈善事業を装ったこの会社丸ごと、あいつらの話、あいつらの国、見せかけだけの仕事、全部いんちきよ。ただひとつの本心は、象牙が集まる営業所に赴任して歩合を稼ぎたいと云う欲望だけ。あいつらが騙し合って悪口言い合って憎み合っているのは、ただそれだけのためだった。でも、実際に小指ひとつでも上げたか

と云うと、いや、とんでもない。結局、世の中には馬を盗んで寛される人間もいれば、手綱を見ただけで、何見とるんだと責められる人間がいる。ひよいと馬を盗む。ものの見事に。うまいもんだよ。たぶんそのまま乗っていける。でもな、どんな仏様みたいな温厚な人間にも許せん手綱の見方と云うもんがある」

「何でこの男の愛想がいいのか、よくわからなかったが、部屋で話しているうちに、はッと下心に気づいた。情報を聞き出そうと云う魂胆よ。何かにつけて、欧州がどうか、あなたもご存知のあの人がどうか、あの墓石の街で誰と知り合いか探りを入れてくる。ちよつと威厳保とうと頑張っているが、小っちゃな目が、好奇心で、丸い雲母みたいに輝いとった。最初は呆気にとられたが、すぐにこいつがわしから何を聞き出すのか物凄く興味がわいてきた。どう考えても、こいつがありがたがるようなことは、わしのどこを探しても見つからん。奴の戸惑った顔をいい気味だと思って眺めていた。はつきり云って、わしの中にあるのは嫌悪感だけ。頭の中も、あの哀れな蒸気船のこと以外、何も入っとらん。奴はわしが素ッ惚けて知らん顔していると思ひ込んでいた。とうとう腹を立てて、みなぎる怒りを隠すために欠伸をした。わしは席を立った。と、板に描いてある小さい油絵に気づいた。衣を纏って目隠しした女が、火のついた松明を掲げている。背景は暗かった、ほとんど黒。女の動きは自信にあふれている。顔に映った松明の灯りが、不吉な雰囲気を醸し出していた」

「わしは絵に惹かれた。奴は蠟燭を差した空のシャンパンの小壇（気づけ葉よ）を持って、律儀に絵のそばに立った。訊くと、クルツさんがこれを書いたと云う。この営業所で、一年以上前に、現地向かう手筈が調うのを待つ間。「なあ、頼む」わしは云った。「そのクルツさんって、一体何者よ」

「内地営業所の所長ですよ」奴は素ッ気なくそう云って、そっぽを向い

た。「そいつはどうも」わしは笑った。「そしてあなたは中央営業所の煉瓦造りだ。そんなことはみんなわかってる」あいつはしばらく黙りこんだ。「畏ろしい人ですよ」ようやく口を開くと、突然、熱く語り始めた。

「憐憫を広め、科学を伝え、進歩をもたらし、あとは僕なんかにはわかりません、悪魔にでも訊いて下さい。僕たちには欧州から指示された運動を導く人が必要です、知性向上、博愛精神、ただ一つの目標に向かつて、と云う」「誰がそんなこと云ってるんよ」「みんな云ってますよ。そういうことを書いている人もいます。クルツさんはそのために来たんです、特別な人です。ご存知の通り」「何でわしが知ってるんよ」わしは心底驚いて遮った。奴は聞く耳を持たん。「知ってるでしょう。今は一番いい営業所の所長、来年は支部長補、二年後は……いや、クルツさんが二年後にどうなるかは、たぶんあなたのほうがご存知だ。新興派閥、良識派のあなたが。クルツさんを直々に送り込んだ方たちがあなたのことも誉めてましたよ。いや、否定しなくていいんです。人を見る目はあるんです」わしにもようやくわかった。あの叔母さんの偉い知り合いが、この若造に思いもよらん力を及ぼしとる。わしは思わず噴き出しそうになった。「あんた、会社の極秘報告書読んどるか」奴は言葉を失った。愉快この上ない。「クルツさんが支部長になったら」わしは真剣な顔で続けた。「もうあんたにチャンスはないな」

「奴は突然蠟燭を吹き消した。わしらは外に出た。月が出ていた。黒い人影がだるそうにうろついて、じりじり云う光に水をかけていた。月明かりに蒸気が立ち昇る。撲たれた黒ン坊がどこかで呻いた。「うるさい駄だ」相変わらず元気な口髭の男が近づいてくる。「ざまアみる。掟破りには折檻。ガツンと。手加減はなしだ、手加減は。これに限る。もう二度と火事は起きん。前から支部長に云ってたんだ……」男はわしの連れに気づくと、急にしおらしくなった。「まだ寝てなかったですか」卑屈な心の裡を覗かせてそう云った。「そりやそうでき。いや、危なっかしい。眠

れたもんじゃない」男は消えた。わしはそのまま河原に向かった、奴も後からついてくる。「くずどもめ、失せろ」耳元できつい言葉が漏れた。霊場巡りが寄り集まって、大げさな身振り手振りでも何か話しているのが見えた。何人かはまだあの棒を持つとる。わしは思ったが、あいつらは絶対寝床にもあの棒を持っていく。困いの向こうでは、月光を浴びた山林が亡霊のように立っている。葉の摺れるかすかな音、あの悲惨な中庭の遠いざわめき。地の静けさが、じかに心に響いた。その底知れなさ、その畏ろしさ、あの息をひそめる世界の信じがたい現実。どこか近くで、撲たれた黒ン坊が弱々しく呻き、それから深い溜息をついて、わしはこの場を立ち去ろうと足を速めた。手が腕にまとわりつくのを感じた。「お願いです、誤解されたくないんです。とくにあなたには、あなたは僕よりずっと先にクルツさんに会える。私と云う人間について誤解されたくないんです……」

「わしはこの張りぼての悪魔メフィストフェリスに喋らせておいた。試しに指で突いたら破けそうな気がした。たぶん中は空っぽで、小さなごみくずでも転がってるんだろ。あいつは、今の支部長の下でいずれ支部長補になるうと思ってるんだよ。そこにクルツが来て、二人ともかなり困ったことになったのは想像がつく。あいつは必死に喋っていた。わしはあえて止めなかった。斜面に引き揚げられて、巨大な河の生き物の骸むくろみたいになつたわしの蒸気船の残骸に凭れて。鼻を撲つ泥の匂い、ああ、太古の泥の。目の前には、太古の森の深い静寂があった。黒い水溜りに斑らな光が落ちていた。月影が一面に銀の紗うすかさを拡げていた。生い茂る草の上に、ぬかるみの上に、絡み合い神殿の壁よりも高く聳える草木の壁に、暗い間に輝く、広く音もなく流れ輝く、あの巨大な河の上に。すべてが圧倒的で、何かを孕んで、静まり返るなかで、あの男は夢中で自分のことを喋っていた。わしは二人を視つめる、この途方もない存在の面おもてに浮かぶ静寂は、恩寵なのか、脅威なのか。こんな処に迷い込んだわしは何なの

か。わしはこの押し黙ったものを操れるのか、それとも向こうがわしを操るのか。わしはこの物言わぬ、そしておそらくは耳も聞こえんもの巨きさを、途轍もない巨きさを感じた。中に何があるのか。象牙がぼつぼつ出てきた。あの中にクルツがいると聞いた。それももう十分聞いた。嫌と云う程。でもな、なぜか全然イメージがわかんない。あの中には天使や悪魔がいると云われたくらいに。あんたらのなかに火星に何かいると信じてる奴がいるかもしれないが、それと同じ。昔、知り合いに火星人の存在を信じていた、本気で信じていたスコットランド人の帆縫い手がいた。どんな格好でどんな風に歩くんよって訊いたら、俯いて「四つ足で」とかぼそぼそ云う。ちよつとでも笑おうもんなら、六十にもなつたいいおっさんが喧嘩吹っかけてくる。わしは何もクルツのために喧嘩売るつもりはなかったが、法螺吹きになるくらいクルツの姿を追い求めていた。知つての通り、わしは嘘が嫌いよ、大嫌い、我慢ならん。それはわしが人よりあつげりる性格だからではない。ただ単に、嫌な気持ちになるんよ。嘘は死の予感がする、破滅の匂いがある。この世で一番嫌いなもの、忘れてしまいたいもんがそれなんよ。嘘をつくると、惨めな、嫌な気持ちになる、腐ったもん齧つたみたい。気質なんよ、多分。そうだな、わしは欧州に顔が利くようなことをあの若造に勝手に想像させて、嘘をついたも同然よ。一瞬にして、あの呪いまじなをかけた霊場巡りと同じいんちきになった。それはただ、クルツを助けるのに何か都合がいいと思つたからよ。あの頃まだ見たこともなかったクルツを。そう、わしにとつてクルツはまだ言葉でしかなかった。あんたらと同じで、まだあの男を見ることがなかった。あんたらが見えるか。話が見えるか。何か見えるか。わしは夢の話をしようとしているように、無駄なことしているようだ。夢の話をして、あの夢の感じは伝わらん。わけがわからず、面喰らつて、どうしていいかわからない、あの錯乱に身イ悶えて必死であらう感覚、何か信じがたいものに手足押

さえつけられている感じ、夢で一番肝心なのはそこなんよ」

マールウはしばらく口を閉ざした。

「……いや、無理よ。人生の忘れ得ない時間に身体を襲ったあの感じは、絶対に伝わらん。本当なのは、意味があるのはそこなんよ。言葉にならない、骨身に沁みる肝心な処は。夢と同じで、わしら、ひとりりで生きとる……」

マールウは何か考え込んでいるかのようになら口を閉ざし、それから付け足すように云った。

「もちろん、あんたらはあの頃のわしより見えとる。あんたらにはわしが見える、あんたらの知つとるわしが……」

すでに辺りの闇は深く、話を聞いているわれわれは、互いの顔も判別できない程だった。離れて座っているマールウは、もうずいぶん前からひとつの声でしかなかった。誰も、一言も発しなかった。みんな寝てしまったのかもしれないが、私は起きて、聞いていた。夜の河のじつとりとした空気のなかで、まるで人の唇を介さず、ひとりりで語られているかのようなこの話にそこはかとなく濼う不安、その鍵を握る一節を、言葉求めて、私は聞いていた。

「……そう、わしは喋らせておいた」マールウは再び話し始めた。「わしの背後にどんな力があるか、好きに想像させておいた。そうよ。本当は何もないのに。わしの背後にあるのは、わしが凭れている、みすぼらしい、草臥れたぼんこつの蒸気船だけ。奴はべらべら喋っていた。「みんな前に進まなくてはいけないんです」「こんなところに来たのは、月を眺めるためじゃない、そうですよ」クルツさんは「何でもこなす天才」ですが、天才だって「きちんとした道具、賢い部下」がいたほうが仕事が捗るでしょう。煉瓦は造っていません、それはなぜかと云うと、物理的な事情で不可能なんです、あなたもよくご存知の通り。僕が支部長の秘書的な仕事をしているとすれば、それは「まともな人間なら、上司から

信頼されて、それをわけもなく拒むでしょうか」。わかりますよね。ああ、わかる。だったら、これ以上何がお望みなんです。わしが欲しいのはリベット、そう、喉から手が出るくらいリベットが欲しいんよ、仕事を進めるために、穴をふさぐために。海沿いに行けば、箱で、箱でよ、何箱も積んである、あふれるほど、あちこちに。あの高台の営業所にも、歩けば蹴飛ばすほど敷地に散らばっていた。リベットはあの死の森にも転がり落ちていた。ちよつと屈むだけで、ポケットいっぱいのリベットが集まる。ただ、肝心な処にリベットが一個もないんよ。ちよつどいい鉄板はあるが、それを留めるリベットがない。毎週、使いの黒ン坊がひとり海岸に向かう。肩から書類かばん提げて、手に棒持って。週に何度かは、隊商が海岸から交易品を運んでくる。見るだけでぞつとする不気味な光沢のキャラコ、二束三文の硝子のビーズ玉、染みのついたどうしようもない木綿のハンカチ。リベットは一個もない。人夫が三人いれば、あの蒸気船を浮かべるのに必要なリベットを運べるはずだった」

「奴はだんだん腹を割ってきたが、わしが煮え切らない態度をとるので、ついに我慢の限界に達したようだった。云つときますが、僕は神も悪魔も恐れませんが、まして人間など誰ひとりとして怖くありません、そんなこと云つての。わしは、それはよくわかるが、わしの欲しいのはまとまった量のリベットだと、クルツさんも事情を知ったら絶対リベットを欲しがらるだろうと云った。毎週、海岸に手紙出してるんだろ……。『そんな』奴は泣きそうな声で云った。「あれは上からの指示で書くんです」わしはリベットを要求した。物にはやり方と云うものがある、賢い人間にはの。奴は態度を変えた。ひどくよそよそしくなつて、出し抜けに河馬の話を開始した。蒸気船で寝ていて(わしは昼も夜もわしの船から離れなかった)気にならないんですか。いつから生きてるのかわからん困った癖の河馬がいて、夜になると河原に出て敷地の中をうろついた。はじめは霊場巡りが皆で表に出て、手当たり次第にライフルを撃ちまくっていた。夜通

し見張りをする奴さえた。ただ、何をしても無駄だった。「あの動物は不死身なんです」奴は云った。「でも、この土地で不死身なのは獣だけで、人間は、わかりますか、人間はここでは何の力もないんです」奴はしばらく月光を浴びてそこに立っていた。ちよつと歪んだ繊細な鉤鼻。瞬きしない雲母の目が光っていた。それからぶつきらぼうにお休みと云うと、さつさつと行ってしまった。動揺して、かなりうるたえているのがわかった。この数日に比べて、希望が持てるような気がしたの。奴と別れて、わしの恩人と向き合うと心からほつとした。つぶれて、歪んで、ぼろぼろになったおんぼろの蒸気船。わしはよじ登った。足元で、空のハントレーパーマーのビスケット缶を蹴飛ばして歩くような音がする。造りは決して頑丈ではない、見た目もかなり悪い。ただ、頑張つて手を入れたから愛着がわいていた。どんな偉い友達も、ここまでではしてくれん。こいつは一步踏み出すきつかけをくれた、自分に何ができるか考えるきつかけをくれた。もちろん仕事は嫌いよ。のんびり楽しいこと、あれこれ考へてるほうがいい。仕事は嫌い、好きな奴なんていない。でもな、仕事は自分を視つめるきつかけをくれる、そこが好きなんよ。自分の現実を、誰のためでもない自分のために、人には絶対わからん自分の現実を。

人には上ツ面しか見えん。肝心なところは人には絶対わからんよ」
「誰かが甲板の艦のほうに座つて、ぬかるみの上に足をぶらぶらさせていたが、別に驚かなかつた。わしは営業所にいる数人の整備士と結構仲良くなつていた。他の霊場巡りはもちろん見下していたがの。きつとマナーがなつたらんとか、そういう理由だろ。座つていたのは親方で、本職はボイラー技師、腕のいい職人だった。骨と皮だけのひよる長い男で、黄ばんだ顔して、大きい鋭い眼をしていた。いつも浮かない顔して、頭はわしの手の平くらいいつるつる。ただ、抜け落ちた髪があごにくっついて新天地で水を得たのか、腰の辺りまであご鬚が伸びていた。小さい子六人抱えて、奥さんに先立たれて（子供は妹に預けて来たんよ）、伝書鳩

に熱をあげていた。凝り性で、素人とは思へん。鳩の話になると夢中になった。仕事が終わると、ときどき小屋から出てきて、子供や鳩の話をしてくれた。仕事で泥まみれになって船の底に潜らんといかんときは、用意しておいた白いナプキンのようなものでひげを覆った。ちゃんと耳にかける輪ツかがついている。夕方になると、そいつを水辺にしゃがんで念入りに洗い、小柴の上に恭しく広げて乾かした」

「わしは親方の背中をたたいて「リベットが来るぞ」と叫んだ。親方は「えッ、リベットが」と自分の耳が信じられないように驚いて立ち上がった。それから声を潜めて「あんた……ほんとに」と囁いた。何で二人して気違いみたいなことしたのか、自分でもわからん。わしは口到人差し指をあてて、わけありげに頷いた。「やったな」親方は頭の上で指を鳴らして、片足を上げて叫んだ。わしはジグを踊つてみた。わしらは鉄の甲板の上ではしゃぎ回った。蒸気船の残骸がカンカンと恐ろしい音をあげ、水溜りの向こうの原生林に反響して、寝静まつた営業所に雷のような音が響いた。掘ツ立て小屋の霊場巡りが、何人か目を覚ましたはずだった。灯りのついた支部長の小屋の戸口を黒い人影が遮り、人影が消え、それからすぐに戸口も消えた。わしらは騒ぐのをやめた。蹴散らした静寂が、また地の奥から押し寄せてきた。見上げるような草木の壁、じつと月影を浴びる幹と枝と葉叢と花を垂らした大枝が、繁り合い纏れ合い一体となつて、無言の生命が触手を伸ばして侵蝕してくるような、草木の波がうねり、湧き立ち、波頭を立てて、今にも水辺に崩れ落ち、ちっぽけなわしらのちっぽけな存在をことごとく押し流してしまふような錯覚に襲われた。しかし、それは動かなかつた。遠くの方で、強く水を打ち鼻を鳴らす鈍い音が響いた。太古の魚竜が、あの巨大な河で燦めく光を浴びているような音だった。「そうだよな」親方がわれに返つた声で云った。「リベットが来ないはずないよな」確かにそうだった。リベットが来ない理由など、ひとつも思いつかなかつた。「あと三週間で来る」わし

は自信を持ってそう答えた」

「でも、リベットは来なかった。リベットの代わりに、蹂躪が、厄災が、御一行がやって来た。それは、それから三週間の間に何隊かに分かれて来た。先頭はいつも驢馬に乗った白人、真新しい服を着て、革靴を履いて、驢馬の背の高みから、目エ輝かして見ている左右の霊場巡りに一礼した。驢馬のすぐ後には、傷だらけの趾をした不機嫌な黒ン坊のいきり立った集団。山ほどのテントが、折り畳み式の腰掛けが、ブリキの箱と白のケースと茶色の行李が中庭に投げ出され、営業所の混沌の底知れない感じがまた少し強まった。そんな分隊が全部で五つ来た。キャンプ道具や食料品を売る店を次から次に襲ってばらばらに逃げてきたような、盗品を山分けするために、店を襲った後で荒野らに運び込んだかのような、異様な雰囲気漂っていた。どうしようもない混乱、運び込んだものはいかがわしいものではなかったが、この馬鹿げた集団を見ていると、何か強奪品のように見えた」

「この狂おしい一団は、エルドラド探検隊と名乗った。極秘任務を帯びているようだった。ただ、話すことは浅ましい海賊と同じ。度胸もないのに無謀、気が弱いのには貪欲、意気地もないのに残虐。慎重さとか深い考えは、誰一人、かけらも持ち合わせていなかった。世の中の仕事には、そういうものが要ると云うことを知らないようだった。ただ、地の奥から財宝を筆りとることが目的、金庫をこじ開けるこそ泥と一緒に、掘って立つ使命感がなかった。この立派な事業に誰が金を出したか知らんが、隊長は支部長の叔父だった」

「見た目はさびれた町の肉屋、目の底にずる賢さが潜んでいた。短い足でこれ見よがしに太鼓ツ腹を運んで、一隊が営業所に叢がっている間、甥以外の誰とも喋らなかった。二人は一日中辺りをうろついで、顔をつき合わせて延々と話をしていった」

「リベットのことで思い悩むのはやめた。そんな馬鹿げたことは案外続

かんのよ。畜生と云って、あとは成り行きに任せることにした。考える暇は沢山あった。時々、クルツのことを考えた。特に気になっていたわけではない。そう。ただ、ある種の使命感を持ってやって来たあの男が、いずれ上に上り詰めるのか、上り詰めればどんな仕事をするのか、知りたい気はした」